

「生活支援技術」におけるICTを活用した実習指導の改善

1 はじめに

福祉科における実技指導では、言語による説明だけでは理解が不十分となりやすく、学習者の習熟度にばらつきが生じやすい。特に、動作の細部や順序を伴う実技は、繰り返し視覚的に確認できる教材が乏しいことから、生徒が自己学習として振り返る機会が限られている。その結果、実技の理解が一度の説明や練習に依存しやすく、定着に課題が生じている。また、教員にとっても、複数の生徒が同時進行で練習を行う際、進捗状況や生徒の困難さを十分に把握することが難しい。さらに、実習記録では、新たな学びや気づきが反映されていないこともあり、記録に苦手意識をもつ生徒が少なくない。これは、教員の添削に時間と労力を要する要因にもなっている。

そこで本研究では、タブレット端末による動画撮影やクラウド上での情報共有、生成AIを活用したレポート分析・フィードバックを取り入れ、生徒にとっては学習のしやすさと振り返りやすきの向上を、教員にとっては評価・指導の効率化と指導の質的向上を目指した実践を行った。

2 単元の概要

- (1) 科目名 生活支援技術
- (2) 対象生徒 福祉科2年生(29名)
- (3) 使用教材 教科書「生活支援技術」(実教出版) 介護福祉士養成講座
「生活支援技術Ⅱ」(中央法規出版)
- (4) 単元名 第4章 自立に向けた排泄の介護

3 単元の目標

- (1) サービス利用者の状態や状況に応じた、安全・安楽な排泄の支援について理解するとともに、自立した日常生活を送るために必要な支援方法を身に付ける。 【知識及び技術】
- (2) サービス利用者の状態や状況に応じた、安全・安楽な排泄の支援について課題を発見し、科学的な根拠に基づいて創造的に解決する。 【思考力, 判断力, 表現力等】
- (3) サービス利用者の状態や状況に応じた、安全・安楽な排泄の支援について自ら学び、主体かつ協働的に取り組もうとしている。 【学びに向かう力, 人間性等】

4 指導と評価の計画(15時間)

第4章 自立に向けた排泄の介護	15時間
第1節 自立した排泄とは	
第2節 自立に向けた排泄の介護	
トイレでの排泄の介助方法・ポータブルトイレでの排泄の介助方法	(3時間)
おむつでの排泄の介助	(6時間)
尿器、差し込み便器での排泄の介助	(3時間)
陰部洗浄	(3時間)

指導計画

※○印は評定のために用いるもの

時間	学習活動	評価		評価基準・評価方法
		観点	記録	
第4章 自立に向けた排泄の介護 【ねらい】 利用者の尊厳を守り、安全かつ清潔に配慮した支援方法を実践することができる。				
1	・排泄の仕組みや高齢者の排泄の特徴を理解する。	知	○	・意図的な情報収集ができるようコミュニケーション技術を用いて情報収集シートに記入できる。 授業プリント
2 ～ 4	・トイレ介助の方法を身に付ける。	知 思	○ ○	・ポータブルトイレの適切な設置位置を理解し、安全な移乗介助ができる。 授業の様子 ・手順や配慮事項を正しく整理でき、課題を具体的に把握できる。 実習レポート
5 ～ 10	・おむつでの排泄の介助方法を身に付ける。	知 思 主	○ ○ ○	・安全な体位変換ができ、漏れやずれを防ぐ適切なおむつの当て方ができている。 実技チェック ・利用者の気持ちに気付き、配慮事項を考えることができる。 実習レポート ・自己の課題を明確にし、介助方法を検討しながら練習することで解決することができる。 授業の様子
11 ～ 13	・尿器、差し込み便器での排泄の介助を身に付ける。	思 主	○ ○	・用具の正しい使用方法を理解し、安楽な体位を考えながら介助ができる。 授業の様子 ・協力的に実習に参加することができる。 授業の様子
14 ～ 15	・清潔で、感染予防に配慮した陰部洗浄の方法を身に付ける。	思 主	○ ○	・プライバシーを保護しながら手袋やおむつの使用など感染予防に配慮した方法を実施できる。 授業の様子 ・グループ内で、留意事項についてアドバイスし合うことができる。 授業の様子

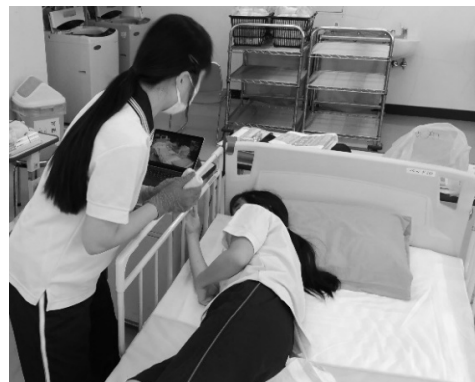
5 成果と課題

(1) 成果

① 実技デモンストレーションの撮影による理解の定着

実技指導においては、1回目のデモンストレーションは説明を交えながら行い、生徒は配付されたプリントにメモを取りながら確認した。2回目は説明を省き、実際の介助と同様の流れで実施し、その様子を自身のタブレット端末で撮影した。

練習場面では、生徒が自分の不安な部分を動画で確認したり、動画と同じ速度で介助を行えるように練習したりと、動画を効果的に活用する姿が見られた。実技チェック前の自主練習や欠席者への補充にも動画が活用でき、理解の定着に有効であった(資料1)。



【資料1 動画を確認しながらの練習】

② 実技練習の状況を Teams 内のエクセルで一覧化

Teams で共有した Excel ファイルに、1 回の実技が終わるごとに、生徒は、実施したことと介助の所要時間を入力できるようにした(資料 2)。また、困っていることがある場合は「困っています」と記入できる欄も設けた。これにより、生徒は他者の所要時間を把握でき、手順だけでなく時間も意識して実技に取り組む姿勢が見られるようになった。実習は、男女をパーテーションで区切り、男性教員が男子生徒、女性教員が女子生徒を担当して指導していたため、教員が全体の進捗状況を把握しやすくなった。「困っています」の入力はなかったが、教員が状況を把握した上で声を掛けることができ、指導の効率化につながった。

生活支援技術		おむつの介護 実習の進み具合一覧					
氏名	介護者 1 回目	時間	介護者 2 回目	時間	介護者 3 回目	時間	
1	○実施	7 分以上	○実施	5分～5分30秒			
2	○実施	6分30秒～7分	○実施	6分～6分30秒	○実施	5分30秒～6分	
3	○実施	7 分以上	○実施	7 分以上			
4	○実施	7 分以上	○実施	5分～5分30秒			
5	○実施	6分30秒～7分	○実施	6分～6分30秒	○実施	5分30秒～6分	
6	○実施	7 分以上	○実施	5分30秒～6分	○実施	5分30秒～6分	
7	○実施	7 分以上	○実施	6分～6分30秒	○実施	5分30秒～6分	
8	○実施	7 分以上	○実施	6分30秒～7分	○実施	5分～5分30秒	
9	○実施	7 分以上	○実施	5分～5分30秒			
10	○実施	7 分以上	○実施	5分30秒～6分	○実施	5分～5分30秒	

【資料 2 介護の実施状況を入力した Excel シート】

③ 実習レポートの Google フォーム提出と生成 AI での分析・コメント付与

実習レポートの提出方法を紙様式から Google フォームに変更したことで、提出忘れや用紙の紛失がなくなり、提出状況が改善された。紙媒体に比べ、生徒の心理的な抵抗感が低く、再提出にも迅速に対応する姿が見られた。また、教員にとっては、手書き文字の癖や誤字によって内容が読み取りづらいという課題が解消され、内容本位の評価がしやすくなった(次頁資料 3)。生成 AI を用いて、文章表現・具体性・課題と解決策・改善のための助言の 4 点について分析し(次頁資料 4)、最初は、教員の指導用資料としてのコメントを作成した(次頁資料 5)。その後、生徒に返却するために、表現を調整し、内容は柔らかく指摘、表現は断定的な指摘などのプロンプトを加えていった(次頁資料 6・次頁資料 7)。これにより、具体性や課題を押しえたフィードバックを効率的に行うことが可能となった。

介護施設の 7 割以上がパソコンやタブレット端末を使った記録業務を行っている現状があり、情報活用能力を育成するという点でも、意義があったと考える。

【資料3 Google フォームで提出されたレポート】

番号	学び・感想	目標に対する課題・反省
1	学んだことは解除を行う際の声かけや準備です。私は実技の練習を行っている途中で止まってしまう、何を言えばよいか分からなくなってしまいました。しかし、同じグループの人が介助を行っているところを見ていると、しっかりと丁寧に移動をする際や立ち上がる際の声かけができていて、このように介助を行うということを学ぶことができました。	今日はポータブルトイレの排泄介助を行いました。行ってみたところあまり介助をしかりと行うことができませんでした。なぜかという自分の理解不足と頭の回転が遅かったからです。なので次回からはいい工夫ができるように、先生の介助の行い方をしっかりと観察し改善していきたい思います。
2	今回の学びは羞恥心の配慮の仕方についてです。この授業を通して感じたことはズボンを下ろしている時間を少なくすることや排泄時の配慮が大事だと感じました。排泄中などもバスタオルをかけることで羞恥心に配慮しつつ体が冷えるのを防ぐことができると分かりました。人に見られていると自分も便や尿が出にくくなると思い、この実習を通して更に羞恥心への配慮の重要性に気付くことができました。	今回の目標の羞恥心に配慮をした支援をすることに対する反省は、ズボンの上げ下げの際に少し手間取ってしまい不快感を与えてしまったことです。なぜかという、支援を行っている際に下肢ということもあり丁寧に脱がせていました。ですが、その際に先生から「早く脱がせた方が恥ずかしくないと思うよ」とアドバイスをもらいました。実際自分が利用者役として行っている際は、ゆっくりやられているとむずむずとした感覚があり、不快感がありました。なので課題はいかに早く丁寧に排泄までつなげられるかが大事だと思いました。

【資料4 生成AIへのプロンプト】

<ol style="list-style-type: none"> 1. 文章表現が適切か（敬語や用語の使い方、分かりやすさ） 2. 具体性（他者に場面が伝わるかどうか） 3. 課題と解決策の明確さ 4. 改善のための助言 <p>この4点についてそれぞれの実習レポートをフィードバックしてください。</p>
--

【資料5 生成されたコメント①】

番号	最初の生成コメント			
	文章表現	具体性	課題と解決策	助言
1	丁寧に適切	声かけや準備の不十分さが伝わる	声かけが途切れる、準備不足。解決策は抽象的	声かけを順序立てて準備し、事前に想定しておく
2	尊厳保持を丁寧に表現	動作の具体例は少なめ	尊厳保持の意識はあるが方法が不足	声かけ・衣服の扱い・環境配慮など行動を具体化

【資料6 リフレクションシートのためのコメント作成のフォーマット】

<ul style="list-style-type: none"> ✓ まず肯定 ✓ 次に伸ばす点をやわらかく提示 ✓ 「～すると、～が伝わります」と締め

【資料7 生成されたコメント②】

番号	リフレクションシート用コメント
1	声かけや準備の大切さに気付けたのは素晴らしいです。記録でどのように声かけをしたかをもう少し具体的に表現できると、介助の様子が伝わると思います。
2	羞恥心への配慮を考えられたのはとてもよい視点です。この考えを記録で更に具体的に書くと、配慮の工夫が伝わると思います。ズボンの上げ下げは重点的に練習しましょう。

④ 実技試験に替わる動画提出による実技チェック

実技試験に替えて、生徒が自身の介助の様子を撮影し、Teams に提出する形式で実技チェックを行った。その結果、これまでのように教員の前で一人ずつ実技を行う方法と比べて、生徒の待機時間の短縮、複数の教員による確認、プライバシーへの配慮が可能となった。また、緊張しやすい生徒も教員の前で直接実施する形式ではないことで、練習どおりの動きを発揮しやすくなっていた。介護実習担当教員とも動画を通して習得状況を共有でき、介護実習中の指導について協議することができた。

(2) 課題・まとめ

本実践は、2年生を対象としたものであったが、1年生の同科目では学習項目がより多く、タブレット端末を用いた動画活用は更に効果を発揮する可能性があると考えられる。また、実習レポートのデータ化や実技試験を動画提出に変更したことで、生徒一人一人の取組状況や課題を把握しやすくなり、これまで見えにくかった生徒の学習過程を捉えることができたように感じる。特に、実習レポートでは、毎回、一番に提出する生徒が固定していることや、動画を通して、困難な場面に直面した際の対応の仕方に生徒ごとの特徴があることが明らかになった。

本実践は、2学期のみの取組であったため、継続的な効果については、今後更に検証していく必要がある。今後は、学年や単元を広げて実践を継続するとともに、評価方法やフィードバックの在り方についても検討を重ね、より効果的な実技指導の在り方を探っていきたい。